

令和４年度環境保全型農業直接支払交付金における地域特認取組等に係る技術検討会 概要

日 時：令和４年２月２日（水）１０：００～１１：００

場 所：オンライン開催

出席者：【委 員】秋山博子委員、江口定夫委員、木附誠一委員、楠本良延委員

【秋田県】農林水産部 小松主幹、大張副主幹

生活環境部 高橋主査

農業試験場 伊藤上席研究員

【農水省】農業環境対策課 永田課長補佐、櫻井課長補佐

概 要：

○ポイント

令和４年度に新しく支援を要望する地域特認取組について、

- ・炭の投入（福島県、千葉県、大阪府）の取組は地球温暖化防止効果が見込まれる
- ・IPMと組み合わせた畦畔除草及び無代かき移植栽培の実施（秋田県）の取組は、対象地域とされた大潟村及び八郎湖集水域においては環境保全効果（生物多様性保全及び水質保全）が見込まれる

との意見があった。

都道府県より令和４年度の支援要望があった地域特認取組及び化学合成農薬の低減割合の特例措置のうち、令和３年度からの継続の要望についてはこれまでも技術的検証等が行われていることから妥当と考えられる旨を事務局より説明。その後、令和４年度に新しく支援を要望する地域特認取組について検討を行った。

【炭の投入（福島県、千葉県、大阪府）について】

事務局より、資料３に基づき、支援要件及び環境保全効果について説明。委員からの意見及び主な質疑は以下のとおり。

（委員）炭の投入については、これまでも複数の府県で認められている取組であり、土壌炭素貯留効果についても科学的知見があるので問題はないと考える。

（委員）生産者からの協力も得られそうということか。

（事務局）地域特認取組は、地域の取組意向等を踏まえて申請されている。

【IPMと組み合わせた畦畔除草及び無代かき移植栽培の実施（秋田県）について】

秋田県より、資料３及び資料４に基づき支援要件及び環境保全効果について説明。有識者からの意見及び主な質疑は以下のとおり。

（委員）生物多様性保全効果については、高い効果が確認されていると考える。支援要件では畦畔除草の回数を４回以上と設定しているが、５回６回となると生物多

様性が低下する傾向もある。生物多様性という視点では3～4回、多くても4回くらいに留めるのがベストと考えるがいかがか。

(秋田県) 現場では6月上旬に1回、出穂期までに2回、収穫の前に1回除草を行うのが一般的であるため、4回程度が実態に即していると考ええる。ただ、斑点米カメムシの被害を抑えるためには出穂期前の除草は欠かせない。

(委員) また、無代かき栽培についてもアカネ類の個体数に増加が見られるなど生物多様性にもポジティブな影響が報告されていることを申し添える。

(委員) 無代かき移植による水質保全効果は土壌条件や水文地質条件等によって異なるため、必ずしも全ての水田において高い効果が期待できるわけではない可能性があるものの、今回の対象地域(大潟村+八郎湖集水域)の土壌・水文地質条件下であれば、既存の研究結果も踏まえて、効果が見込めると考えられる。横浸透による漏水がある場合には額縁代かきを行っても良いという要件については、表現まで修正する必要はないものの、水質保全という観点からは、漏水がみられる場合には原則行うほうが望ましい。なお、畦畔に除草剤を継続的に使用すると、植生が劣化することで畦畔の土壌侵食等による水質悪化がみられることがあるため、畦畔除草を物理防除で実施することは、水質保全の観点からもよいと考える。

(委員) 資料4-1において、無代かきの実施ほ場では、SSとT-N、T-Pでは差引流出負荷の減少が顕著だが、CODでは流入と流出が同程度のため、このような点についても今後進めていく中で効果を確認していただきたい。また、無代かき栽培による用水量の増加や、代かき作業を行わない代わりに発生する碎土・均平等の作業が、現場で取り組むうえでの支障にならないかという点を確認したい。

(秋田県) CODの削減量が比較的少ない理由は今後も検証が必要と考えているが、八郎湖の水質保全を図るため、N・P・SSの流出負荷軽減効果が確認されている本取組をまずは推進していきたい。取水量については、大潟村では元々浸透速度が低いから用水量が少ないという特徴があり(全国平均の3割程度の水量と認識)、多少水量が増えたからといって大きな問題にはならないと考えている。代かきに代わる作業については、レーザーレベラーの普及が進んでいるので対応可能と考えている。

(委員) CODの削減効果について、資料4-1では、慣行の場合は流出負荷が流入負荷を上回っているのに対し、無代かきほ場では流出負荷が流入負荷と同程度となっているため、慣行栽培と比較するとCODについても削減効果があると考えられるのではないか。

(委員) 流入と流出の差分という観点で無代かきほ場と慣行ほ場を比較すると、CODも削減されると考えることができるということについて理解した。

以上